# 銀杏色の太陽

歌璃舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀杏色の太陽

【Ｎコード】
Ｎ５０７９Ｉ

【作者名】
歌璃舞

【あらすじ】
２年ぶりに訪れた代々木公園で見た
当たり前のように過ぎていく日常
なぜかそれが奇跡的に思えた瞬間、
私の中で何かが変わろうとしていた。

「何か」の展示をしているという”不確かな”情報だけを頼りに
アタシは代々木公園へ向かった。
ちょうど2年前、設計課題の敷地見学で訪れたとき以来だった。

透き通るように青い空をした２００９年１１月１日。
その日の代々木公園には銀杏のツーンとした独特の匂いが鼻を刺す。
日曜日ということもあって、公園内は多くの老若男女で賑わっていた。

ギターを担ぐ名も知らぬミュージシャンが陽気に歌い
その横でカップルが手拍子を合わせている。
老夫婦が若い人に劣らぬ走りを見せている。
木陰では古風な女性が静かに本を読んでいる。

ベンチに腰掛け、その先にある何かを見つめるような目をして
小さなノートにペンを走らせている人がいる。
きっと、それはどれにも似ない美しい物語のはじまりなのだろうと
勝手に想像するアタシがいる。

鮮やかなグリーン色をした芝の上には星の数ほどの
小さなシートが点々と広げられ
それらのシートの上には、
こんな時間から一足早く顔を赤らめている人や、
何をするでもなく空を見上げている人がいる。
そんな光景は別に珍しいわけでもなく、
何度とも出会ったことはあるはずだが
なぜか急に懐かしい気持ちになり、
アタシはそれらのシートの上を観察する。
理由は分からないが、見ていて飽きないのだ。

２年前の設計課題では、カフェだったり色々と練りに練った案
があったなあと色々と思い出して、
何があるといいかと色々と考えたあげく、
何も建てない方がいいのかもしれない。と
そんな結論にため息さえ出ないほど、
ここには全てが揃ってしまっているような気がする。

そんな聞こえない呟きを吐きながら、公園内を一回りしていると
入り口付近で来たときにはなかったはずの人だかりが見える。
何かと気になって歩み寄ってみると
そこには全身を真っ黒に染めあげ、リーゼントをキめた人たちがい
る。
写真でしか見たことのなかったが、
それがロックンロールというものなのだろう。
彼らの革ジャンの内側には刺青と割れた腹筋がこっちを覗く。

彼らは時を越えた存在となり、昭和のロックンロールにノッている。
その姿はとても人間らしくて仕方がなかった。
近寄りがたいが、消えてはならない。
アタシにとってはそんな存在で、
似たような格好をした高円寺の人たちはアタシの血の中に流れている。
それでも、そういった格好が似合わないアタシは、
黒くて細身のパンツを履き、スタッズベルトを腰に巻き
その後ろポケットに挟んだ財布のチェーンをジャラジャラと鳴らして
いつも見えない拍手をしている。

ビールを片手に、セブンスターを吸っている彼らの姿は
それらが彼らのために存在しているように見えてきて、
アタシのポケットに入っていたタバコは同じはずなのに、

全く別モノのようであって。

今日のセブンスターは少し苦い味がした。

風が吹くと、少し寒くて

でも、そんな事はどうでもよくなって

彼らにとってはその風も熱を呼び起こしてしまうような

わずかな観衆みたいな存在なのだろうとか、

そんなことを勝手に考えてアタシはペンを走らせる。

そのペンが止まる前に彼らのダンスが終了したことに、

アタシは周囲の拍手の音で気づく。

またその終了のゴングを聞いた人の多くは

外国人であることを確認する。

そういえば、外国人の知り合いをどこかへ連れて行くという

機会がしばしばあったが、代々木公園には来たことがなかった。
いつのことだか分からないが、次の機会に連れて来ようと思い、
同時に、そのときに変わらない姿の彼らがいることを切に願った。
拍手をしていたその人だかりは、
間もなく「渋谷」に溶けていった。
その溶けていく人々の様子をしばらく見ていると、
すぐ近くに屋台が見えた。

たこ焼き。５００円８個入り。
そんなに上手そうでもなかったし、決して安くはない値段だった。
それでも、そんなことはどうでもよくなっていた
アタシの足は屋台へ一直線に向かっていた。
屋台のおじさんに
「今日のコイツぁ機嫌が悪くてサァ。ちょっと待ってな。」
と言われ、しばらくその屋台の中で待つことにした。

隣の屋台に警察官が来て、何か話しているのが見える。
どうやら違法らしく、店をたたむように話をしているようだったが
店のおじさんはずっと楽しそうに笑っている。
警察と彼が何を話していたのかあまり聞き取れなかったが、
どうやら打ち解けたような感じでその警察官は笑顔で姿を消した。

「マヨネーズかけるかい？」と急に言われたのに驚いて、
「はい。お願いします。」と反射的に答えてしまった。
アタシの良くない癖だ。
目的も忘れ、また公園内を歩きながらたこ焼きをつついた。
特別に上手くもないたこ焼きは、忘れていた空腹に逆効果だった。

しばらく歩いていると、遠くから路上ライブの演奏が聞こえてくる。
だんだんとその声が近づいてくる。
聴いたこともないその歌は、

とてつもない引力でアタシを引き寄せる。
思わずその中に入ってしまいたくなるほど、
透明で、広大な湖のような声をした彼は
とても優しい目をしていた。
しばらくその声に横たわっていると、心地よく眠れそうな気がした。

その感覚を感じているのはアタシだけでないことを、
その隣で手拍子を合わせるカップルも、
一人で体を揺らす女性も、皆知っている。
何も言わずにただ座っている女子高生たちの目が、
そう言っているような気がした。

少し暖かな湖が、外がすでに寒くなっていることを
忘れさせてくれているのに気づいたのは、

時計の針が午後６時を指した頃だった。
吹く風はさっきよりも寒くなって、あたりも暗くなってきたので、
アタシは家に向かうことにした。

目的だった展示は結局みつからなかったけど
別にそんなに問題でもないし
途中からどうでもよくなってしまったし
また探してから行けばいいとか、
そんな事をシクシク小さく考えていると
高円寺へ向かう電車の窓から空が覗いた。
鮮やかなオレンジ色に染まり、いつもより遥かに大きな空だった。

当たり前のように過ぎて言った一日に
特別なことは何一つなく、そんな一日が奇跡的に思えたのは、
銀杏の実が落ちる１１月のことだった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5079i/

銀杏色の太陽

2010年12月18日15時09分発行